

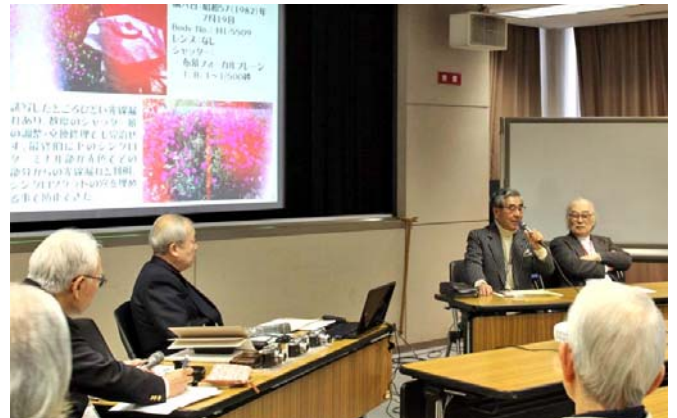
## 研究会報告(その1)

# 座談会「ゼノビア 35 の謎」

出席者: 宇田川武良、竹内久彌、林田吉弘

司会小滝日出彦

まとめ(編)林田吉弘



(司会 小滝): 会報132号(2017年12月発行)の持参カメラ紹介欄で宇田川武良さんのゼノビア35(写真1)を取り上げたとき、その校訂を推測を交えて行ったのは私ですが、竹内会長から最終チェック時「分からないことは分からないと書きなさい」と、科学者らしい厳格さで「ダメだし」を頂き、最終稿は宇田川さんの原文に即した内容に戻し更なる調査、検証を約束しました。その結果を宇田川さん、竹内会長を交え報告したいと思います。

まず宇田川さんに入手の経緯などをお伺いします。

(宇田川): 今から36年以上前の昭和57(1982)年7月銀座松屋の中古カメラ市の三共カメラのブースで見つけたものです。手にとって矯めつ眇めつしながら、購入を迷っていると、横に神戸の蒐集家を手ぐすね引いて待っているのに気が付いた。

それであの田中政雄さん(故人)が「ヨセ」と言うのを尻目に、ようやく決心し求めたものです。もしこの時買わなければこのゼノビア35は関西に持って行かれるところでした。

試写した所シャッターは不良気味、浅草のHカメラでオーバーホールして貰いましたが、相変わらず特に高速でのむらが多く、又赤い光線漏れがありました(写真2)。

数度の修理でボディー前面に2個あるシンクロソケットの上のソケットの赤い部分からの光線漏れと判明、赤い光線漏れは直ったが、高速シャッターでのシャッターむらは直らず(写真3)、修理をしてくれたHカメラでは内部の部品に印された番号の不統一などからプロトタイプという見解です。

(小滝): ではプロトタイプと思われるゼノビア35の調査を行った林田会報編集長に報告して貰います。尚、ここからは、紙面の節約のため「である調」で進めます。

### ゼノビアという名前のカメラ

ゼノビアという名前は1930年代に創業した岡田光学精機が昭和26年(1951)年社名を第一光学と変更した後、今までのワルタック



写真1 ゼノビア 35 Body No. M1-No\_5509

ス(イコンタ型セミ判スプリングカメラ)をゼノビアと変更した時から使い始めた。その後昭和31年(1956)年第一光学が破綻した後再建された会社名にもゼノビア光学として使われている。そのゼノビア光学と言う会社も昭和33(1958)年には破綻し消滅した。従ってゼノビアという名のカメラは昭和26年から7年ほどの間存在したカメラである(表1参照)。

ゼノビア35という名のカメラは今回発見され

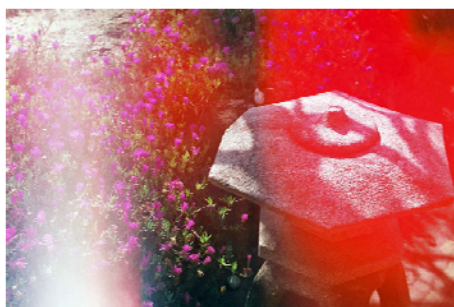


写真2 シャッター不良、赤い光線漏れがひどい



写真3 左側に高速で露光不足が見られる



写真4 ゼノビア 35 F2 (1958年)

表 1 戦後の岡田光学精機、即ち「第一光学」、「ゼノビア光学」時代の製造カメラ年別一覧 (http://camera-wiki.org/wiki/Zenobiaから筆者加工)

会社名		第一光学										ゼノビア光学							
Year	Type	昭和26(1951)年		昭和27(1952)年		昭和28(1953)年		昭和29(1954)年		昭和30(1955)年		昭和31(1956)年		昭和32(1957)年		昭和33(1958)年			
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後		
4.5 × 6 folding Camera	viewfinder	Waltax Junior		Zenobia P						Zenobia M									
		Waltax Senior		Zenobia C															
		Waltax Deluxe																	
		Waltax Acme				Zenobia H													
6 × 6cm TLR Camera	knob advance					Zenobiflex				Zenobiflex II		Zenobiflex F-II							
												Zenobiflex Automat							
														Zenobia 35		Zenobia 35 F2.8			
35mm Range-finder Camera	F2.8															Zenobia 35		Zenobia 35 F2.8	
																Zenobia 35 F2			
																Ichicon-35			

たライカ型のゼノビア35と、レンズシャッター型のゼノビア35(写真4)の2種類が存在する。レンズシャッター型のゼノビア35は国産カメラ図鑑には、昭和32(1957)年登場のゼノビア35、昭和33年登場のゼノビア35 F2とゼノビア35 F2.8の3機種が掲載されていて、どれも稀少度「★3つ」のカメラである。表1に示すようにゼノビアと名付けた35mmカメラはこのレンズシャッターカメラのみである。

この会社がライカ型カメラとして1954年前半に開発したとされるイチコン35(写真5)がある。国産カメラ図鑑では「★5つ」の極めて稀少なカメラとしているが、実際に販売されたのかは疑問である。同図鑑では後のオーナー(Honor)の原型となったカメラと記載されている。更にはLEICA COPIES (by HPR)には第一光学で開発されたが、その良好な仕上げにもかかわらず成功せずカメラの製造は目白光学へ売却され昭和31(1956)年Honor名で発売されたとある。

このイチコン35とゼノビア35の内部を比較してみた(写真6)。違いは5つほどある。

- ① フィルムレール間にゼノビアは小さな溝が刻んである。
- ② 画面サイズが異なる。  
ゼノビア35:24×35mm  
イチコン35:24×36mm
- ③ フィルムゲートがイチコンはトンネルゲートであるが、ゼノビアはバルナック型ライカと同じフィルムをレールに圧着するタイプである。
- ④ フィルムマガジン挿入部のダイキャスト鋳物形状が異なる。
- ⑤ 写真では分からないが底部の内部構造が異なる。

以上からイチコンとゼノビアは別設計のカメラと考えるのが妥当であろう。なぜ第一光学



写真5 イチコン35

は同じ時期に二つのライカ型カメラを開発したのであろうか？

#### オーナーとイチコンの関係

目白光学へ売却されたとされるイチコン35と目白光学が開発したとされるオーナーとはどう言う関係であったか？写真工業誌昭和31(1956)年8月号に、目白光学の山下亀之助名でオーナー35 S1型の紹介記事が出ている。それによると「2年あまりの間技術総動員でライカタイプのカメラをその精密さを少しも失わず、廉価で製作販売することを目標に試作し続けられてきたのがオーナー35 S1である」とあり、開発が1954年頃から始まったことが分かる。イチコン35が第一光学から外部に売却された時期と、目白光学の開発開始時期が一致する。また同年7月号のアサヒカメラ誌の写真界ニュースには近日発売として目白光学のオーナー35の紹介記事が出ている。これによると目白光学は後に製造販売会社とされるようになる瑞宝光学とは兄弟会社である旨の記載がある。

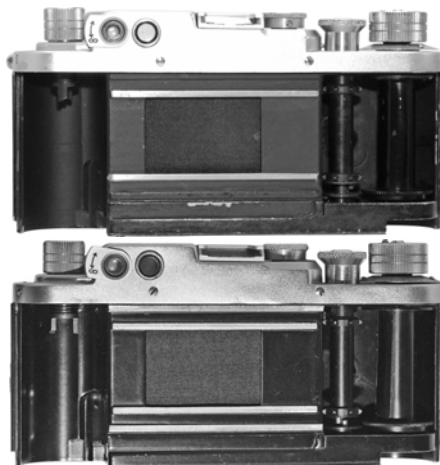


写真7 オーナー35 Sa型(上)イチコン35(下)の裏面内部比較写真

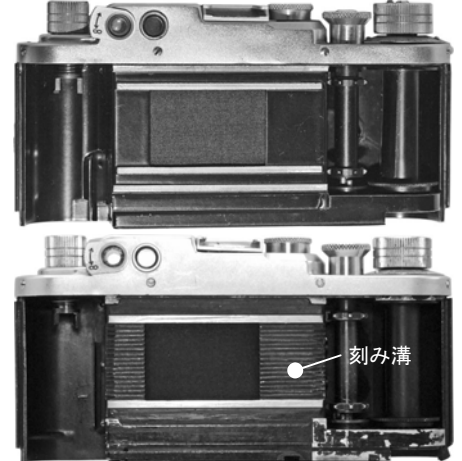


写真6 イチコン35(上)とゼノビア35(下)の裏面内部比較写真

また、オーナー35 S1と同じ時期のものであろうと思われる矢澤征一郎会員所有のオーナー35 Sa型(写真6)と、イチコン35(写真5)の内部比較写真を写真7に示す。オーナー35 Saはプレッシャープレートを受ける部分が黒塗りされているので、写真ではフィルムゲートの形式が分かり難いがイチコンと同じトンネルゲートである。また画面サイズ、フィルムマガジン挿入部鋳物形状、底面構造も同じである。これらのことから私(林田)は、

- イチコン35とオーナーは同じか、同じ系列のカメラである。
- 第一光学が開発着手したが製品化をあきらめたので、開発者が分離独立(多分瑞宝光学の後盾で)し開発を続けた。
- 最終的には瑞宝光学からオーナー35 S1として発売されたが、裏・底蓋一体取外し程度の改善では市場で評価されず終わった。と推測する。

#### ユニオン光学とユニオン35

オーナーの初期型をお借りした矢澤会員から、そのオーナーと共に、写真工業2008年11月号105ページの萩谷剛氏のユニオン光学に関する記事や、2009年に板橋区立郷土資料館で開催された特別展・板橋と光学の図録Vol.2の44ページのユニオン光学の元技師長澤勝治氏の記事にある、「ユニオン光学」の「ユニオン35」と言うライカ型カメラが参



写真6 オーナー35 Sa型(矢澤会員所有)



写真8(左)ゼノビア35、写真9(右)ユニオン35、フィルムレールだけのフィルムゲート、フィルムマガジン室鋳物形状、フィルムレール間の横溝、本体底部の構造・形状等は基本的に見える。

考になるのでは、との情報があつた。早速調べてみると写真工業106ページのユニオン35の写真がゼノビア35とそっくりであることが判明した。写真工業にある写真とほぼ同じ角度で撮影したゼノビア35とユニオン35とを並べた写真を示す(ゼノビア35:写真8、ユニオン35:写真9-ユニオン35の写真は全て萩谷剛氏提供)。

ユニオン光学は、昭和23(1948)年6月八洲電機光学部が分離独立した(後に親会社の八洲電機を吸収した)会社で、現在でも金属顕微鏡、測定顕微鏡などの分野で活躍している会社である。「板橋と光学Vol.2」の生澤氏記事によると、八洲電機が昭和23年頃から手がけたボルト判フィルム使用のCarolの開発を、ユニオン光学で引き継いだ。その次にユニオン光学が開発したカメラが裏蓋の外れるライカ型35mmカメラ「ユニオン35」で、次いで昭和25年にはセミ判スプリングカメラ「ユニオンモデルU」を発表したとある。実は2ページの表1のCamera-wikiの元の表には、第一光学のセミ判フォールディングカメラの欄に、ワルタックスのRebadged Version(銘板違い)としてユニオン・セミとワルコン・セミ(Walcom Semi:ワルツ商会発売)が入っていた。国産カメラ図鑑の写真で見るとワルタックス、ユニオン・セミ、ワルコン・セミ

は銘板以外は同じに見えるが、現物や大きな写真で比べてみるとユニオン・セミとワルコン・セミは同じカメラの銘板違いと見て良さそうだが、岡田光学(第一光学・ゼノビア光学)のワルタックス名、ゼノビア名のセミ判カメラとは、ボディ鋳物形状は同じだが、クローム仕上げの軍艦部のファインダー部の形状が微妙に異なり、タスキ形状も異なる。更にボディーシャッターのリンケージが全く違うことなどから、ダイキャスト鋳物、裏蓋、前蓋プレス部品などは共用しているが、ゼノビアやワルタックスとユニオン・セミ、ワルコン・セミは別のカメラであると推測する。多分第一光学とユニオン光学は何らかの技術・部品共用等で協調関係にあつたと考えるのが妥当であろう。ワルコンはユニオン光学からワルツ商会に提供されたものであろう。このことからユニオン35はユニオン光学で昭和24(1949)年前後(昭和23年のCarol開発から、昭和25年のセミ判カメラ発表の間)に開発着手され、この試作品が第一光学に提供され、ゼノビア35と名付けられたのであろう。尚現存するユニオン35とゼノビア35のボディ番号はそれぞれM1-No. 5501(不鮮明なので確かではないが)とM1-No. 5509であった。「55」を製造年を示す数字とするとユニオン35は昭和30(1955)年製造の1号機、ゼノビア35は9号機

となる。第一光学は昭和29(1954)年にイチコン35を開発したが(多分ユニオン35開発の情報を得ていたであろう)、それも開発を断念しているのだから当然ゼノビア35の商品化は考えられなかったであろう。ユニオン光学も第一光学のイチコン35の経緯を見て製品化は断念したものであろう。

今回の調査で第一光学が開発したイチコン35と第一光学系の名称を持つゼノビア35は、外観の類似性はあるが、ダイキャスト形状、画面サイズなど多くの点で別物であることがはっきりしたと考えられる。また2009年の板橋の郷土資料館で開催された特別展まで存在が知られていなかったユニオン光学が開発したユニオン35と、ゼノビア35は同一もしくは同一系統のカメラであることが明確となったと考える。

(竹内会長):一応ゼノビア35と言う新発見のカメラの謎は解明できたように思われるが、ゼノビア35、ユニオン35等発展系のライカコピーの位置づけはどうか考えるか聞きたい。

(林田):写真工業誌昭和31(1956)年9月号に掲載された「レンズ交換式35ミリカメラの現状」と題する記事がある。この中に当時新品として入手可能なカメラ一覧があつたのでこれをベースに私が若干加筆したものを表2に示す。著者の大場栄一氏は「現在」の国産35ミリカメラの内レンズ交換使用できるものはかなり多数あるが、残念ながら大部分はライカの流れをくむものばかりで、特に独創的なものはない」と一刀両断に切つて捨てている。

しかしこの表を現在の目で見直してみると、著者大場氏の言うような、M3ライカが出た後にもかかわらず、バルナック型ライカの域を出ないものが大半であるが、そこから抜け出そうとかなりの工夫を加えているカメラもある。

表2の下地を灰色にし、文字を太字としたも

表2 連動距離計レンズ交換式35mmカメラ一覧 - 写真工業1956(昭和31)年9月号より一部筆者加筆

カメラ	レンズ	明るさ	焦点距離	シャッター速度	シンクロ	特長	定価	メーカー	発売年月
キヤノンVT	キヤノン	1.2	50	T. B. 1~1/1000	FP. X	蝶番式裏蓋・一眼式変倍距離計 トリガーレバー巻上げ	115,000	キヤノンカメラ	1956年08月
キヤノンIVSb	キヤノン	1.5	50	T. B. 1~1/1000	FP. X	一眼式変倍距離計/ファインダー	85,000	キヤノンカメラ	1952年12月
キヤノンII S	キヤノン	1.8	50	T. B. 1~1/1000	FP. X	一眼式変倍距離計/ファインダー	68,000	キヤノンカメラ	1954年06月
キヤノンIID	キヤノン	2.8	50	T. B. 1~1/500	なし	一眼式変倍距離計/ファインダー	48,000	キヤノンカメラ	1952年10月
チヨタックスIII F	ヘキサ	3.5	50	T. B. 1~1/500	F		29,800	ライゼカメラ	1955年07月
オーナー35	ヘキサ	3.5	50	T. B. 1~1/500	FP. X	裏蓋取外式	29,500	目白光学	1956年07月頃
レオタックスF	トプコール	1.5	50	T. B. 1~1/1000	FP. X		65,000	昭和光学	1954年06月
レオタックスK	トプコール	3.5	50	T. B. 1/25~1/500	FP. X		26,000	昭和光学	1955年07月
レオタックスT	ヘキサ	3.5	50	T. B. 1~1/500	FP. X		35,000	昭和光学	1955年10月
メルコン	ニッコール	2	50	T. B. 1~1/500	FP. X	蝶番式裏蓋	48,000	目黒光学	1955年12月頃
ミノルタ35 II	ロッコール	2	50	T. B. 1~1/500	FP. X	蝶番式裏蓋・2軸式FPシャッター 一眼式距離計	49,000	千代田光学	1953年02月
ニッカ5	ニッコール	1.4	50	T. B. 1~1/1000	FP. X		73,000	ニッカカメラ	1955年03月
ニッカ3S	ニッコール	2	50	T. B. 1~1/500	FP. X		52,000	ニッカカメラ	1952年09月
ニコン S2	ニッコール	1.4	50	T. B. 1~1/1000	FP. X	裏蓋取外式・1軸式シャッターダイヤル レバー巻上げ・クランク巻戻し 一眼式距離計	83,000	日本光学	1954年12月
タナックIVS	タナー	2	50	T. B. 1~1/500	FP. X	蝶番式裏蓋	38,500	田中光学	1955年02月



写真 10 キヤノン VT

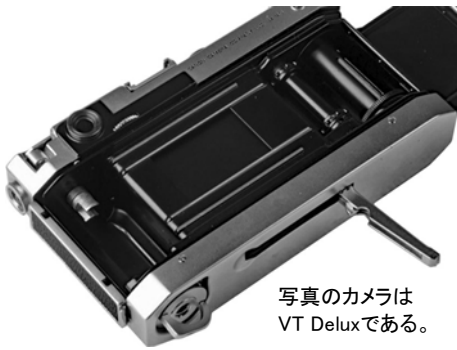


写真 11 キヤノンのトリガーレバー



写真 12 ミノルタ 35 II

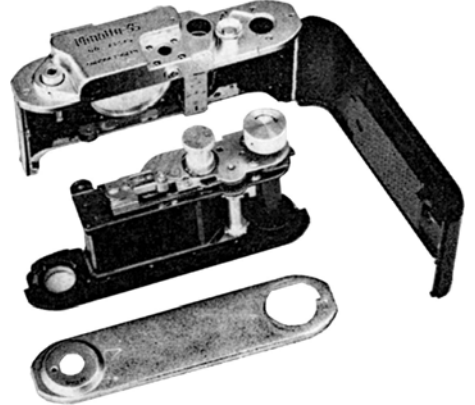


写真 13 ミノルタ 35 II の分解写真



写真 14 ニコン S2



写真 15 リコール I 型(高島名誉会長所蔵品)

のがその代表例である。

以下その工夫を列記すると  
キヤノンVT(写真10、11)

- 蝶番式裏蓋
- 一眼式変倍距離計・ファインダー
- トリガーレバー巻き上げ

ミノルタ35II(写真12、13、図1)

- 蝶番式裏蓋
- 一眼式距離計・ファインダー

ニコン S2(写真14)

- レバー巻き上げ、クランク巻き戻し
- 一眼式距離計・等倍アルパダ式ブライトフレームファインダー
- 底・裏蓋一体取り外し
- 高・低速同軸シャッターダイヤル

これらのカメラを開発した技術者達は結局一眼レフへと目を向け新しい展開が始まり、遂にはドイツのカメラ工業を追い越すことになった。M3ライカに対抗して開発され、会社倒産後に生産されたレオタックスG等例外的なものもあるが、バルナック型ライカコピーに終始するか、多少の改良を加えた程度の会社、自前のレンズを作れなかった会社などは結局淘汰されたのは当然であったと思う。

ちょっと本筋から離れるがレンズ交換を目指したフォーカルブレンシャッター機として、裏・底蓋一体取り外し式を完成させたカメラに戦前の昭和14(1939)年発売のバルナックライカに似た構造を持つベスト半裁判のカメラ、「リコール」(Ricohl)(高島名誉会長所蔵、写真15、16)がある。裏・底蓋一体外しはユニオン35、ゼノビア35、オーナーS1が最初では

写真のカメラはVT Deluxeである。

ない。このリコールはパーフォーレーションのないフィルムを用い、巻き上げとシャッターチャージを同時に行う極めてユニークなフォーカルブレンシャッター構造(図2)を採用している。

(小滝):最後に「ゼノビア」というネーミングののし出は何でしょうか？

(林田):昨近「イスラム国/IS」が破壊したシリアのバルミラ遺跡の惨状が報じられています。バルミラは紀元前1世紀にローマ帝国の属州になった後も、広い領土の自治権をもち交易で繁栄したシルクロードの要衝です。

3世紀にバルミラに善政を敷き、文化保護者としても後世まで知られたのが、美貌で名高い「ゼノビア」という女傑です。だが、版図を広げる動きに出てローマ軍に滅ぼされた。ローマに連行された後も別荘を持ち優雅に暮らしたとの話もある。なぜ、悲運の女王の名前をカメラに付けたのか。よほどローマ帝国史に精通した人がいたのだろう。

(了)

写真 16 リコールの裏蓋を外した所

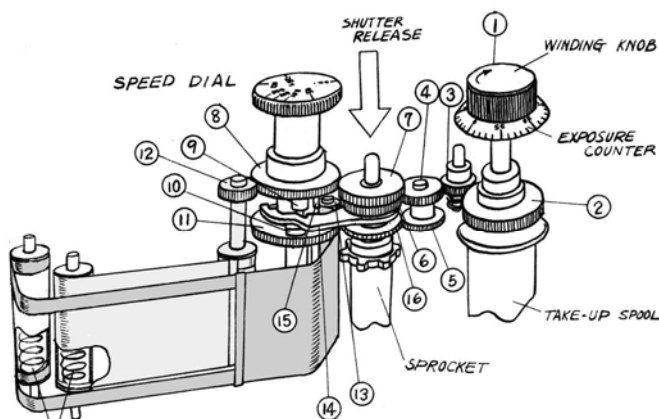


図 1 ミノルタの2軸(4軸)シャッター構造(写真工業 1955年10月号から)

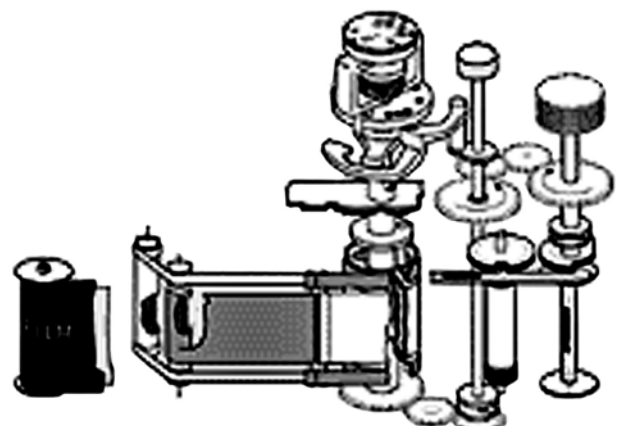


図 2 リコールのシャッター構造

[http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/ricoh-filmcamera\\_lib/library/1938.html](http://www.ricoh-imaging.co.jp/japan/products/ricoh-filmcamera_lib/library/1938.html)